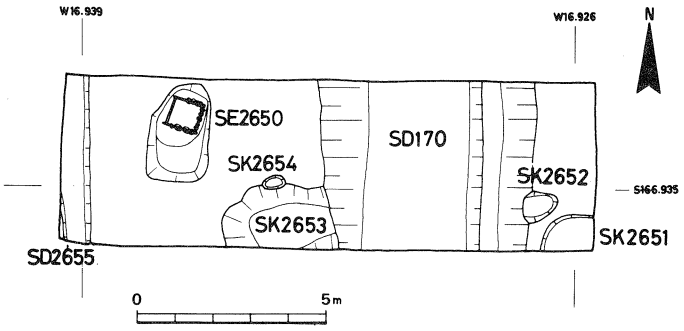
藤原宮第27－3次の調査

（昭和54年4月～昭和54年5月）

調査地は高所寺池の東方約70mにある水田で，藤原宮の東面外濠の推定位置でもある。遺構は耕土・床土下の地表から約50cmの深さにある黄灰色微砂層の上面で検出された。主な遺構には，弥生時代の土坑（SK2651～2653），7世紀後半の井戸（SE2650），藤原宮期の外濠と溝（SD170・2655），12世紀の土坑（SK2654）がある。

藤原宮期の東面外濠SD170は幅5.5m，深さ1.2mの規模である。外濠の堆積層は3層に大別され，少量の土器，木片が出土した。SD2655は外濠SD170の西方6mの位置にある素掘りの南北溝で，幅0.8m，深さ0.2mである。この溝は藤原宮第24次調査（概報9）で明らかにされている南北溝SD2295と一連のものと推定される。7世紀後半の井戸SE2650は，方形に並べた人頭大の玉石の上に井戸枠が一段残り，他の井戸枠はすべて抜き取られていた。検出面からの井戸の深さは1.3m，井戸枠の内法は一辺0.8mである。弥生時代の土坑3基の深さは15～35cmあり，いずれからも畿内第V様式の土器が出土した。

今回検出された東面外濠の規模は，第24次調査等によって明らかになった数値と大差ない。しかし，出土遺物は極端に少なく，他の地点で比較的多く出土している木簡，軒瓦はみられない。その一因として，今回の調査地が藤原宮の東南隅に近く，かつ外濠としては上流部にあたることがあげられよう。なお，第24次調査地と今回の調査地を結んだ東面外濠の軸線は方眼方位に対して北で西に約53′振れている。



第27－3次調査遺構配置図（1：200）